Rotary Rotary International District 2500

2024.2.22（木）
第 30 回例会
（通算3745回）

2023-2024 年度
釧路ロータリークラブ会報

会長スローガン「地域を愛し、未来を語る　ロータリーの輪を広げましょう」

2023-2024 年度
国際ロータリーテーマ
世界に希望を生み出そう
2023-2024 年度
RI 会長 ゴードン R. マッキナリー
第 2500 地区ガバナー
鶴見 誠一郎（紋別港 RC）

第85代会長　後藤　公貴
副　会　長　樋口　貴広
幹　　事　佐藤　貴之
編集責任者　クラブ会報・雑誌委員会

例会日　毎週木曜日 12:30 ～ 13:30　夜間例会 18:00
例会場　釧路センチュリーキャッスルホテル
事務局　釧路市錦町 5-3 三ッ輪ビル 2F
0154-24-0860　0154-24-0411

月間テーマ	平和と紛争予防／紛争解決月間
本日のプログラム	「釧路市長講話」（プログラム委員会）
次週例会	講師例会「MOO コミュニティスペースについて」（プログラム委員会）

■ロータリーソング：我らの生業　■ソングリーダー：牧田　和也君
■会員数　103 名
■ビジター
■ゲスト　釧路市長　蝦名　大也様

会長の時間　後藤　公貴会長

皆さま、こんにちは。２月というのに全国的に、そして釧路も大変温かく過ごし易い陽気に包まれております。寒暖の差が大変激しいので皆さまにはお体をご自愛されて、各方面でご活躍をお願い申し上げます。

本日は嬉しいニュースから。清水輝彦君が久しぶりに例会に出席をしていただきました。（拍手）大変お元気そうで、私も大変喜ばしく思っております。引き続き、また元気に例会にご出席いただければと思います。

さて、なかなか気付かない地域の魅力があるという話です。この冬の釧路でも、まだまだ全国から多くの観光の方が釧路を訪れております。うちも炉端焼きという職種上、多くの方にご来店を賜っております。

昨日、一人の方とお話をする機会があったのです。その方は、年に 10 回から 15 回くらい釧路を訪れているそうです。もちろん、自然を楽しむ、釧路の美味しい食材を楽しむのがメインのお話だったのです。その方が自分で「航空お宅なのです」と言うのです。鉄道では「乗り鉄」「撮り鉄」がそうですが、「乗り空」と言うのですか、分かりませんが、飛行機に乗るのが好きということでこちらに来ているそうです。

その方が全国各地、全国の便で旅をしている中で全国でも指折りの景色が、新千歳空港から中標津空港に向かう空の左側の席で、高度 1 万 1000 フィートがベストだそうです。普通は 1 万 7000 フィートで飛ぶそうですが、気流の関係から 1 万 1000 フィートで飛ぶのに当たった時がすごく喜ばしいそうです。

その方と 1 時間くらい話したのですが、新千歳を出て、少し経つと十勝平野が眼前に広がって来て、中標津に降りる時の飛行機は真っ直ぐ降りずに蛇行して降りるそうです。「その時に知床連山が見えて、本当に素晴らしいのでぜひ乗って、自分でご覧になってください」と言われました。

たまたま、瀧波君が同席をしていたので、近々、私たち「新千歳―中標津」に乗りますので、その時の模様はまた挨拶の中でと思っています。

私は今年、「地域を愛し、未来を語る」というテーマを掲げております。こちらに住んでいても、まだ知らない魅力がたくさんあると思うと同時に、わがクラブには、いわゆる転勤族と言われる数多くの方がおります。外部の目線で、「釧路にはもっと素晴らしい所があるよ」と私たちに教えていただきたいと思います。

先日の日銀の田村支店長のご講話の中でも「可能性に満ち溢れている」という話がありました。

そういうことを学びながら地域の活力に・活性化につなげて行ければと感じた次第です。

本日は、釧路市長のご講話です。釧路市の街づくりで釧路市の明るい未来をみんなで考えて、そして実現して行くのだ、私たちもその一員になるのだと確認し合える有意義な時間を本日も過ごさせていただければと思います。
蝦名市長、よろしくお願い申し上げまして、私の会長の時間とさせていただきます。
本日一日、どうぞよろしくお願い申し上げます。

幹事報告　佐藤　貴之幹事

皆さま、こんにちは。能登半島地震の義援金ですが、締め切りまで残り１カ月となっております。目標金額まであと少しとなっておりますので、皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。

第８回理事会議事録が出来上がりましたので、ホワイトボードに掲示しております。今回の議事録は 11 ページで上って来ていて、そこを８ページまでまとめております。中身が盛りだくさんとなっておりますので、ご確認をお願いいたします。

以上が幹事報告です。

■本日のプログラム■
釧路市長講和

プログラム委員会委員長　八幡　好洋君

プログラム委員会の八幡です。本日は、市長講話ということで釧路市長蝦名大也様にお越しをいただいております。
早速ではありますが、蝦名市長、よろしくお願いいたします。

皆さまにはお手元に資料がありますので、そちらもよろしくお願いいたします。

釧路市長　蝦名　大也様

皆様こんにちは。本日は、釧路ロータリークラブの例会におきまして、講話のお時間をいただきましたことに心から感謝を申し上げます。
先ほど、後藤会長からお話がありましたけれども、清水先生にお会いできて良かったなと思っております。去年 10 月でしたか、お会いした時に「少しずつ復活しており、来年の４月くらいからは診療を」というお話をいただいたところ、既に診療していただいているということです。患者の皆さんからも「良かった」という声が寄せられておりましたので、本当に良かったと思っております。
さて、ロータリークラブの皆様におかれましては、活動を通じて釧路市のまちづくりにお力を賜っておりますとともに、それぞれのお立場から、地域経済を支えていただいておりますことに心から感謝を申し上げます。
令和６年度予算に関する資料を皆様のお手元にお配りしているところですが、既に報道もされておりますので、本日は別のお話をさせていただきたいと思います。
昨日、新聞に出ておりましたが、今年は「第 34 回北前船寄港地フォーラム」が釧路市で開催されます。北前船の寄港地ではない釧路市において、また、太平洋側の地域としては初開催となるところであり、昨年は岡山で開催され、その前は沖縄で開催されております。6 月 28・29 日の２日間の日程で、全国から 300 人以上の来釧が見込まれており、ＥＵ・ヨーロッパからも来釧する予定となっています。今後、プログラムなどを公表してまいりますのでご覧いただければと思います。この実行委員会には、本日ご出席の小船井会長にも入っていただいているところであり、引き続き宜しくお願いいたします。
この北前船のスタートは、各地の様々な産物を全国に送り届けて富を築いてきたもので、この地域からは昆布が流通していたところであります。また、フォーラムの開催に先立ち、6 月 27、28 日の日程で、北海道東部の３空港（根室中標津、とかち帯広、女満別空港）から上陸し、“ひがし北海道”の歴史をたどる３コースを設定し、フォーラムの開催地である釧路に集結をする「エリア交流会」を開催することにより、東北海道を盛り上げていこうと考えておりますので、是非ご協力をお願いできればと思っております。
昨日、第３回釧路都心部まちづくりフォーラムを開催いたしました。今回のフォーラムは、駅高架というハード整備を行った後、その基盤上でどのようなまちづくりを行っていくかを中心に議論が交わされました。様々な事業を実施する際、まずハードを整備してから次に何を行うかといった考え方がある一方、予めこの地域でどんなことができたらいいかというイメージを持った上で、それに必要なハード整備を進めるという考え方もあるものと思います。釧路駅周辺のまちづくりについては、この両面から、この地域の中に賑わいを創出していこうということで、この度のフォーラムを開催しました。
今まで三十数年、「中心地に賑わいをつくっていこう」ということで、様々な取組を行ってきましたが、実感として誰も賑わいが生み出されたと感じておりません。三十年以上同じことを続けて、一生懸命に取り組んできたにもかかわらず、実現できていないというこ

とは、そもそもやり方が間違っているのではないかと顧みたり、別の手法を考えた方がいいのではないかという考えのもと、釧路都心部まちづくり計画はプランニングをされております。
スクリーンに映されている資料をご覧ください。「駅周辺のウォーカブルなまちづくり」と書かれております。「ウォーカブル」つまり歩くということです。私は、これまでの都市計画が良かった悪かったという議論ではなく、これまでは車中心のまちづくりを行ってきたということです。
公共交通が脆弱だから車を使うということもありますが、車を中心にまちづくりを考えていくと、そこから人が取り除かれてしまう。様々な施設を整備する場合、必ずポイントになるのは「駐車場をどうするか」という点です。確かに、「駐車場がなければ車で来ることができない。併せて公共交通は脆弱だ。」ということで車社会に拍車が掛かり、公共交通がどんどん弱くなっていくのです。
先日、築50年を経過した児童館を訪れる機会があり、建物の中を運営委員や母親クラブの方々と一緒に見てみたところ、かなり厳しい状況であると感じました。このような中、2月20日に地域や学校関係者の方々にもお集りいただいて、老朽化した児童館に関する意見交換会を開催しました。皆さんからお話を聞く中で、現在、小学校の下校時に親が車で迎えに来るケースがあると伺って驚きました。義務教育ですから学校は歩いて登下校するものと思っておりましたが、塾に通うなどの理由から車で迎えに来ているそうです。
こうしたお話からも、改めて車中心の社会になっていることを実感しました。このようなケースも含めて徐々にバスに乗らなくなり、結果としてバス会社の収支が悪化し、併せてバスの運転手さんも不足するなど、悪循環に陥っていくことになるのです。確かに公共交通は不便な部分もありますが、現在の車中心の流れをどのような方向に進めていくべきか、改めて考えることが重要です。
例えば、多くの方が訪れるイオンはウォーカブルな作りになっています。大きな駐車場はありますが、店内は歩いて見て回る形になっています。夏休みの思い出を絵に描くという課題の中で、子どもたちがどんな絵を描いているかというと、例えば、白糠町に住んでいる方は昭和のイオンで遊んだ絵を描いており、厚岸町や浜中町に住んでいる方は釧路町のイオンで遊んだ絵を描いているのです。全国的にこのような傾向になっているようです。
このような状況を踏まえた上で、今後のまちづくりをどうすべきかを考えますと、既に車中心の世の中になっているため、車が無ければ困るということは念頭に置きつつも、街中にある公の場所を賑わいのある空間にしていくことが重要であろうと思うところです。中心市街地に車が少なく安全なエリアを造り、公共交通を充実させることにより、人々が様々な目的で中心市街地を訪れ、賑わいが生み出されるという観点から釧路都心部まちづくり計画をまとめているところです。
駅の高架とまちづくりに関しては、昭和48年から議論がされてきたと聞いております。昭和60年の市議会議員選挙では、公約に「駅の高架」を掲げていた方もいました。こうした一連の流れがあって、公で初めて鉄道高架の検討がされたのは平成4年であります。平成4年から3年かけて「鉄道の駅高架の可能性を検討する」ということで、検討作業がスタートしました。その当時、しっかりと議論されましたが、中々結論が出ない状況でした。その次は、平成15年から19年にかけて公としては2回目となる議論がなされました。後半の2年間では具体的なプランの策定が進められました。
このようにして、平成19年にA案とB案の二つのプランができたのですが、財政的な問題で、どちらもやれる状況にはないということで凍結となっておりました。色々な条件などをしっかり考慮してプランを作るのは望ましいことと思ったのですが、最終的に「できない」という結論となりましたことは、非常に切ないことだと思いました。しかしながら、当時、非常に厳しい釧路市の財政状況がありましたので、鉄道高架に財源を回す形にはなっておりませんでした。
私も平成20年の就任当時から鉄道高架のことは凍結しておりました。これはどうやっても難しいことだから、そのまま凍結にしておこうと最初に考えておりましたが、課題としては頭に入っていました。
こうした中、2011年に東日本大震災が発生したことで、今後どのように防災対策を進めていくべきかを、改めて考えなくてはならない状況になりました。例えば、様々な国や道の制度を使い、一早く市役所の横に防災庁舎を作りました。防災庁舎は30数億円の建物でしたが、釧路市の負担は10%程度で建てることがきました。防災という観点や仕組みを使うことによって、本来は相当額の負担を要する事業を少ない負担で実施できるということを踏まえた際、過去に多くの方が検討した「鉄道高架をやっていこう」、「駅周辺の開発をしっかり進めていこう」という思いを実現できないかと考え、凍結を解除して具体の議論を進めてきたものであります。
併せて単なる高架のみならず、まちづくりの視点で考えますと、30数年間にわたって中心市街地に賑わいを創出しようと取り組んできましたが、未だに成し得ておりません。これを成し遂げるためには、今までと異なった視点で取り組む必要があると考えるものであり、重要となる考え方が、先ほど申し上げた「ウォーカブル」であります。都心部に人中心のエリアを造ろ

うということを基本的な考え方としております。この点をぜひご理解いただきたいと思います。
次のページにスケジュール表が出ています。昨年、北海道が実施主体となる連続立体交差事業に関する調査について国からの補助が入りました。この補助で何に取り組んでいるかというと、「北海道が事業主体となって、このエリアで連続立体交差事業を実施すべきか否かを検討するための調査」が進められております。
国での全体的な進め方は、実際に費用が算定され、「B／C（ビー・バイ・シー）※」について便益コストが1以上あるかなどの確認作業に入って、これをクリアすると事業認可という流れになっています。（※B＝ベネフィット、C＝コスト）
こうした事業化に向けた流れがある中で、釧路市においても鉄道高架への市民理解の促進や機運の醸成を図るべく、釧路都心部まちづくりフォーラムの開催や市政懇談会での説明など、様々な場面で市民の皆さんにお話をしながら進めております。併せて、中心市街地の活性化を含めてどのような絵を描くかについて検討を進め、来年以降の事業認可に向けてしっかり取組んでいきたいと考えております。
以前にもお話しした通り、これまで北大通は車中心ということで、車道を広くしてきました。逆に、歩道の幅をしっかりと確保して、人が安全に歩くことができるとともに、オープンカフェなどを設置できるような空間にすることで、新たな展開を生み出していきたいと考えています。中心市街地活性化研究会には、釧路ロータリークラブの杉村さんにも入っていただいているところであり、皆さんとイメージを共有しながら進めていければと思っています。
駅の高架や中心市街地の活性化に加え、リバーサイドをどのように活用していくかということも重要な視点であり、近年は商工会議所青年部の方々が、ぬさまい広場で「ヒアガーデン」を開催して大変好評となっております。
このような中、令和8年に港湾計画の改訂が控えております。昔の港湾計画の改訂時には、港湾関係者の中で「次はどのような計画にすべきか」という議論を行っておりました。そうではなく、まちのことなのだから全体で連携しながら進めていこうという考えのもと、計画の改訂作業の前に、ワークショップを行って、皆さんからご意見をいただいております。イメージ的には、駅・北大通と末広を含めた面としてのエリア、それとリバーサイド、それと港湾（中央ふ頭、東港区）を含めた形で、しっかりしたビジョンを作っていこうと取り組んでおります。
資料の中央ふ頭の右側の青色で示した部分に、クルーズ船が入港できるようにしようと思っています。現在、大きい船は西港に入港しています。耐震岸壁を造った時は日本基準で造りましたので、あの当時、日本で一番大きかったのは「飛鳥Ⅱ」で5万tから6万tです。また、世界最大のクルーズ船は20万tを超えるものがありました。飛鳥Ⅱが入るためには9mの水深があれば入港できます。しかし、大きさが10万t以上の船になると9mの水深では入港できなくなります。ゆえに、水深が10m以上ある西港の商業船のエリアにクルーズ船が入港するということになるのです。
耐震岸壁を整備する際、水深を11mにしたかったのですが、様々な事情により実現できませんでした。
11mの水深があれば、現存するクルーズ船は全て入港できるのです。近年、クルーズ船は大型化する傾向にあります。飛鳥Ⅱも新造される計画が公表されています。しかしながら、国内では水深の深い岸壁は必要ないという流れになっているようですので、何とかここを進めていこうというものです。
こうやって中心地の中にこのエリアを作りながら様々なことができる形にする。住環境のあるエリアには商店などがあって、まちの中心部のエリアには様々なものがある、機能を集約する。図書館を中心部に設置することも行いました。まだ決まってはおりませんが、例えば、市民文化会館もあります。従来のまちづくりは、地域に満遍なく施設を作っていくという形で行ってきました。しかし、人口減少社会となれば、機能を充実するためには、中心部に一つしっかりとした施設を作る、又はリニューアルするなどし、公共交通で各地域とつなぐ、このようにして人が集まる所ができれば、ビジネスチャンスにつながりますし、様々な展開が生まれてくるものと考えるところであります。
先日、商工会議所から「研究機関を誘致する」とのご提案いただきましたが、これはその通りです。桂恋に国の機関である北海道区水産研究所釧路庁舎があります。また、北海道立総合研究機構の釧路水産試験場は釧路市漁協の少し離れた所にあります。先日、北海道大学水産学部の学部長と養殖の視察のため、ノルウェーに行ってきました。その前段に、三代前の学部長さんとも水産についてお話しをする機会があり、「昔、釧路の北水研に2年間勤務していたが、庁舎の近くに宿舎があるのでまちの中に出ることはなかった」とお話しされていました。
例えば、リバーサイドに研究所があったり、道の施設があったり、研究機関と学生との連携だったりというところを、意図的に生み出すように進めていく。一つひとつがバラバラではなく、一体となって進めていくのが本当のまちづくり、賑わい創出につながっていくものと考えております。これを成し得るのは、今この地域に暮らす我々であるということが私の考えです。
　第一歩として駅周辺の取組を進めてまいりますし、次に、それぞれのまちの要素を一体的に考え、賑わいを生み出していくという観点で、まちづくりに取り組んでまいりたいと思います。どうのこうの申しまして

も、釧路・根室の中心は、中核市はこの釧路となります。医療体制含め、何においてもそうです。都市機能、政治機能、そして、行政機能を生かしていくためにも、こうした流れを構築していこうと考えておりますので、釧路ロータリークラブの皆様のご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

先日、釧路市の新年度予算の講演を何回かやらせていただいた際、とあるところでお話した話題があります。初めてインターネットで見かけて、大変面白い内容だったので本を買おうと思ったのですが、残念ながらアマゾンにも古本屋にも売っていませんでした。著者は有名な人ではないですけど、「開発計画の診断」という本です。ハーシュマンという方が書いた本です。内容は、過去の世界銀行が出資した開発計画を全部詳細に調べ、どういう傾向があるのかをまとめた本であります。全部は見ておりませんが、「計画が成功する条件には二つある」と書いています。

一つ目は便益がどうなっているか、その便益を関わっている人たちが共有できること。しかしながら、計算式に入らない便益もある。その本ではユートピアビジョンとされておりました。ユートピアというと夢物語に見えるかもしれませんが、これを共有できた時に成功に向けた一つ目の条件をクリアするということです。

二つ目は何としても計画を成し遂げるという気持ちがあるかどうかと記されておりました。人には知識があり様々なことを考えます。よって、物事をネガティブな方向に考える傾向にあるということでした。できない理由を考えるのは、「市役所が一番得意だろう」と言われそうですけど。しかし、それでは物事は前に進まないのです。そこで面白い言葉があります。私も初めて聞きましたが、「神の隠す手の原理」という言葉です。計画を進める際の様々なネガティブな要因を、神様が隠してくれるというものです。これはどうでもいいような話ですが、ある意味でネガティブな要因が見えていても見えていないというような場合や、必ず解決できるといった意思を持った時にだけ様々な開発計画が上手く進んで、その成果を得ているということが、「開発計画の診断」に記されておりました。

失敗を避けるために、どうしてもネガティブな視点で物事を見なくてはならないというような風潮が世の中にはありますが、完成形のイメージを共有して、必ずこれはできるという気運を高めていくことにより、絶対に成し得ることができると私は思っておりますので、是非、皆様にご協力をいただければありがたいと思います。

予算とは全く関係ない話をしましたが、このような考え方でまちづくりを進めておりますので、宜しくお願い申し上げます。ありがとうございました。

本日のニコニコ献金

■中島　徳政君　ちょっと良い事ありました。

今年度累計　　403,000 円